
ばく りゅう 麦粒

2020. Spring

麦粒／NO. 135

発行・キリスト教センター

目 次

新入生の皆さんへ	(2)
プロセスをプライドにする	黒 柳 志 仁 (4)
管理人は考えた	日 沖 直 子 (8)
Perspective	A. ロジャー (13)



新 入 生 の 皆 さ ん へ

敬 神 愛 人



(創立者 F.C.クライン)

「先生、律法の中で、どの戒めが最も重要でしょうか。」
イエスは言われた。『心を尽くし、魂を尽くし、思いを
尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが
最も重要な第一の戒めである。第二も、これと同じよう
に重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』

(新約聖書 マタイによる福音書 22章 36～39節)

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。これから皆さんは、この名古屋学院大学でのキャンパスライフを過ごしていくことになりますが、その上で、この大学の一員となった皆さんにぜひ知っておいていただきたいことを簡単にお伝えしたいと思います。

☆

建学の精神「敬神愛人」 私立の学校には、独自の理念、「建学の精神」というものがあります。名古屋学院大学の建学の精神は「敬神愛人」です。これは、キリスト教の聖典である「聖書」の言葉に由来しています。

敬神 神を愛し敬うこと。 愛人 “隣人”を自分のように愛すること。

イエス・キリストは、この二つを大切にしなければならないと人々に教えました。隣人とは、近しい人だけでなく自分以外のすべての人を指すと理解されます。神は私たちを愛してくださっています。その愛をもって、私たちは神を愛し敬い、また隣人愛として他者のためにも愛を向けていく。これを本学の教育の基本にしているのです。

☆

本学の歴史 1883年、アメリカからフレデリック・チャールズ・クライン (F. C. Klein) という宣教師と妻メアリーが、キリスト教の伝道と英語教育を目的として来日しました。彼らは、横浜に英語学校や教会を設立し

た後、1887 年、次の着任地として名古屋にやってきました。彼らは、名古屋に着いたその日から英語の学校を開いたと伝えられています。そして、その学校の教育理念として掲げられたのが「敬神愛人」だったのです。

「名古屋英和学校」と名づけられたその学校は、1951 年、「学校法人 名古屋学院」と名称を改め、そして 1964 年、わたしたちの名古屋学院大学が誕生することとなります。



わたしたちの願い 新入生の皆さんは、これから数年の間、本学の学生として様々なことを学んでいくことになりますが、勉学や研究、課外活動に勤しむのと同時に、本学の建学の精神である「敬神愛人」という言葉を心に留めつつ、人間的に成長していくこともぜひ目標にしてください。

皆さんが、自分自身のことも大切にしつつ、他者を愛していくことができますように…。また、人間同士のかかわりだけでなく、人知を超えた存在に心を向けられるような謙虚で広い視野を持った人間性が、この大学でのキャンパスライフを通して養われていきますように…。



チャペル（礼拝堂） キリスト教主義大学である本学にはチャペルという場所があります。そこでは、毎週、「チャペルアワー」というキリスト教の礼拝が行われています。聖書の言葉と祈りを中心に、教職員や近郊の牧師さんたちによる奨励を聴くひと時です。チャペルアワーを通じて、これからの時代を生きていく上で大切な何かを感じていただければと考えています。

【チャペルアワーの時間帯】

<名古屋キャンパス しろとりチャペル>	月曜日 8：30～40
	火曜日 13：00～13：30
<瀬戸キャンパス チャペル>	金曜日 13：00～13：30

チャペルや付設のキリスト教センターでは、チャペルアワーの他にも、学生活動や聖書研究会、宗教講演会、コンサートなど様々な行事を行っています。詳細はキリスト教センターの掲示板をご覧ください。

チャペルの開館時間は、原則、平日の「8 時 45 分～16 時 45 分」です。祈りの場であることを意識しつつ、学内における皆さんのための“居場所”の一つとして気軽に足を運んでください。

プロセスをプライドにする

黒 柳 志 仁

私は昔の日々を思い出し、あなたのなさったすべてのことに思いを巡らし、あなたの御手のわざを静かに考えています。（旧約聖書 詩編 143 編 5 節）

私は名古屋学院大学で教員として勤めるまで、ドイツに留学をしていました。はじめに北ドイツにあるハンブルク大学に 5 年、そのあとで南ドイツのミュンヘン大学に 4 年半学び、あわせると 9 年半留学をしていました。人生ではじめてドイツの地を旅したのは 22 歳の時で、アルバイトで貯めたお金で、初めてドイツ国内を一周しました。その旅をした当時の景色は今でも鮮明に覚えています。

フランクフルト、ボン、ケルン、デュッセルドルフ、ブレーメン、マイセン、ハンブルクなどの美しい街の景色。ビールやソーセージ、バウムクーヘンなどのグルメ、文豪ゲーテを代表する文学、ベートーベンやバッハの美しい音楽、熱狂的なサッカー、車好きにもたまら

ないクラシックカーやアウトバーン、美しい絵画…、私にとって写真やイメージでしかなかった地が、実際にその地を歩いたことで、「イメージ」から「経験」へと変わりました。

ドイツ語は私にとって、日本では授業で文法を暗記したりドイツ語のテキストを読んだりして、日本語に訳したりすることしかなかったので「本当にこんな難しい言葉、日常で使う人たちがいるのかな？」と思いながら勉強をしていました。ドイツ語の勉強をしはじめ、実際にドイツの大学入試試験に合格して大学に正規入学をしたのは 26 歳の時でした。

ドイツのハンブルク大学は主専攻 1 つに 3 分野、それに副専攻 2 つを選択する必要がある、私は主

専攻に旧約聖書学、組織神学、教会史、副専攻に心理学と哲学を選びました。最初は授業時間割が一週間みっちりあり、講義やゼミにでると、ものめずらしいアジア人がいるので、周りのドイツ人も「君はこの授業は簡単なの?」「来週のゼミ発表、全部準備できた?」と横で心配をしてくれ、またレポート課題のときは、ドイツ語を添削してくれました。日本のことを思い出しながらも「ドイツで勉強したい目標をあきらめてはいけない」

「ドイツの先生に認められたい」、そうした思いをずっと心に抱いていました。授業単位を落としながらも、時間をかけて少しずつ卒業単位を満たしていきました。乗り越えられない目標というのは、遠くにあるものほど大きく見え、近くにくるほど、小さくなってくるものです。いつの日か乗り越えられるようになることを実感する日々にもなりました。こうして留学を終えてみると、当時は大変で辛かったけれど、それも今となつては、どこか記憶の中で美化され、自分の中で受けいれることのでき

る、良い思い出にもなっています。

このように、思い出をたどる、思い出してみる、というのは、私たちにとって、どんな意味があるのでしょうか。みなさんもこれまで生きてきて、いろんな「思い出」があると思います。

今日取り上げた聖書箇所である旧約聖書の詩編は、そうした「思い出」とは何なのか、教えてくれる箇所でもあり、私の留学生活の中で心に残る聖句の1つになっています。

今日の聖書の箇所をもう一度読んでみます(4頁参照)。

「昔の日々」、とはどのような意味があるのでしょうか。昔、とは「時間的に、はるかに隔たった時代」「過ぎ去った頃」という意味です。私たちにとって、「昔」とは過ぎ去った時間として理解をしています。ところが、この詩編が書かれたヘブライ語で読んでみると、「昔の日々」とはミッケデムという言葉で「前にある」という意味で書かれています。

私たちは普段、未来を未だ経験していない前にあるものとして考

え、過去はすでに過ぎ去ったものとして考えています。しかし、この詩編を書いた人は、昔の思い出を自分の「前にある」現実としてみているのです。未来は、わたしたちの後ろからついてくるものであり、背後にあるものである、という理解をしているのです。なぜでしょうか。

このことについて、ドイツのハイデルベルク大学のヴォルフ教授は『旧約聖書の人間論』という本の中で、旧約聖書の時間性について次のように書いています。

「時間の中で、人間はちょうどボートの漕ぎ手のようなものである。これから進むべき未来のほうに背を向けて、時間の中を漕いでいく人に似ている。つまり、ボートの漕ぎ手は、自分が漕いで来た進路によって方向をとりながら目標に到達する。この目前に姿を現した歴史が、未来を証するのである」。

人間は時間の中を漕いでいく、ボートの漕ぎ手のようなものである。目の前に過去を見て、背中に未来を向けている。この時間理解

は、私たちにとってどのようなメッセージがあるのでしょうか。

私たち一人ひとりが歩んできた思い出が、私たちの将来の方向を決める舵取りをする、という大切さを教えてくれているのです。

将来を決めること、それは自分がこれまで、どんなことをして、今、どんなことに興味をもって、今までどんな経験を大切にしてきたのか。将来を決めることは、まずは今日までの自分自身を知ること、ありのままの自分を受け入れること、そこから「はじまる」のです。将来の指針を決めるものは、今の自分自身の人生の歩み方でもあることを、この詩編の時間性は教えてくれているのです。

ドイツで私が旧約聖書の詩編を学ぶ中で、指導教授から教えられたことは、私たちにとって詩編とは、「日々を振り返る日記のように味わうものである」ということです。詩編は旧約聖書、新約聖書を通して最もページ数の多い 150 編から成る書物です。詩編には「賛美の歌」「王の詩編」「嘆きの歌」「感謝の歌」などに分類されてお

り、全体として「アシュレー（幸いなるかな）」という祝福のキーワードを聞きながら、嘆きのときも、悔い改めのときも、メッセージを聞く方法がとられています。

私たちは、いつも礼拝の前と後に賛美歌を歌いますが、なぜ歌うのでしょうか。そのルーツはどこにあるのかご存知でしょうか。

実は、賛美歌は、今日取り上げた旧約聖書の詩編にルーツがあります。旧約聖書の中の「詩編」を、祈りとして指導者と会衆が交互に歌う形で朗唱する習慣がはじまりでした。初期の教会は詩編を弦楽器によってアカペラで歌っていました。そして中世から近世にかけて、このチャペルにも9月から素晴らしいパイプオルガンが奉納されましたが、さまざまな様式の楽器が作られ、礼拝の場で歌われました。それはドイツの音楽家バッハの賛美の歌の原点にもなっています。実は現在の音楽ジャンルであるクラシック音楽も、もともとは教会の中で生まれました。クラ

シックとは直訳すると「古典的」という意味ですが、一般的にはヨーロッパを中心とした17世紀～19世紀あたりまでの約400年間に、バッハやモーツァルト、ベートーベンなどの音楽家によって作られた音楽をいいます。19世紀になるとゴスペルソングが誕生し、祈りを音楽に合わせて歌うようになり、今日に至っています。

聖書箇所で取り上げた詩編…。思い出を自分の前にある現実として見つめ、思いめぐらすことで、これからの方向を確かめながら、未来に到達する。私たち一人ひとりの人生のプロセスをプライドにする大切さも、教えてくれているのです。

今日ご紹介した、この詩編に込められた意味は、長い歴史を通して、嬉しい時も悲しい時も辛いときも、賛美の歌として人々に記憶され、人々が神に向かって歌い、大切にされてきた「生きる知恵」でもあるのです。

管理人は考えた

日 沖 直 子

イエスは、弟子たちにも次のように言われた。「ある金持ちに一人の管理人がいた。この男が主人の財産を無駄遣いしていると、告げ口をする者があった。そこで、主人は彼を呼びつけて言った。『お前について聞いていることがあるが、どうなのか。会計の報告を出しなさい。もう管理を任せておくわけにはいかない。』管理人は考えた。『どうしようか。主人はわたしから管理の仕事を取り上げようとしている。土を掘る力もないし、物乞いをするのも恥ずかしい。そうだ。こうしよう。管理の仕事をやめさせられても、自分を家に迎えてくれるような者たちを作ればいいのだ。』そこで、管理人は主人に借りのある者を一人一人呼んで、まず最初の人に、『わたしの主人にいくら借りがあるのか』と言った。『油百バトス』と言うと、管理人は言った。『これがあなたの証文だ。急いで、腰を掛けて、五十バトスと書き直しなさい。』また別の人には、『あなたは、いくら借りがあるのか』と言った。『小麦百コロス』と言うと、管理人は言った。『これがあなたの証文だ。八十コロスと書き直しなさい。』主人は、この不正な管理人の抜け目のないやり方をほめた。この世の子らは、自分の仲間に対して、光の子らよりも賢くふるまっている。そこで、わたしは言うておくが、不正にまみれた富で友達を作りなさい。そうしておけば、金がなくなったとき、あなたがたは永遠の住まいに迎え入れてもらえる。

(新約聖書 ルカによる福音書 16 章 1～9 節)

みなさん、こんにち。瀬戸キ
ャンパス・金曜 2 限の死生学を担
当している日沖と言います。今日
は、今、読んでいただいたルカ

による福音書の中の、不正を働い
ていた悪い管理人が、自分の身か
ら出たサビでピンチに陥った際
に賢く振る舞い、その結果、主人

に抜け目がないと褒められた、というたとえ話を取り上げ、人生のピンチから脱出する、ということについて、いろいろと想像力を働かせつつ、また、キリスト教とは全く違う宗教である、仏教の立場からもそのことを考えてみたいと思います。

この、不正な管理人、と呼ばれているたとえ話では、自分の主人に借りがある人たちが払う高額の利子を自分の懐に入れて浪費していた管理人が登場します。しかしやがて悪事がバレ、彼は仕事を失うことになりました。そこで、彼は考えました（別の翻訳では、管理人はひとりごとを言った、とあります）。

普通なら、そんな時の選択肢は、（１）悪事をはたらいて貯めたお金を持ってどこかに逃げ、ほとぼりが冷めるのを待つ、（２）悪事を主人に打ち明け、言い訳をしてひたすら許しを乞う、といったところでしょうか。しかし、彼は、逃げたところで再就職のあてはありませんし、主人に許しを乞うたとしても、すでに信用は失くし

ているので、管理人の仕事にとどまれそうもありません。そこで、腹を決めた彼は、仕事を失うことを前提に、そのダメージを他のことでカバーする行動に出ます。逃げたり、主人の機嫌を取り繕う代わりに、自分が主人に代わって管理していた、下の身分の者たちの間に、友達を作ろうとしたのです。彼は主人に借金をしていた人たちを呼び、利子を差し引いた新しい証文を作り、自らの悪事を正すと同時にその人たちと仲良くなろうとします。仕事を失っても、自分を家に迎えてくれる人たちを作るために。そもそも、高額の利子を取り立てていたのは主人であり、管理人はそれを是正したことになるので、主人も文句は言えなかった、これは一本取られたと主人が管理人を褒めた、というのです。

ただ、聖書には、主人が管理人を褒めたとあっても、最終的に彼をどう処分したのか、書いてありません。不正を働いていたのは確かですから、彼はやはりクビになったのでしょうか。仕事を失った

彼は、果たして、人々に迎え入れられたのでしょうか。そのところも、説明されません。たとえば話ですので、細かいところは、ぼんやりとしたままなのです。ただ、聖書の続きの部分には、イエスがこう教えをのべられたとあります。「不正にまみれた富で友達を作りなさい。そうしておけば、金がなくなった時、あなた方は永遠の住まいに迎え入れてもらえる」。この世の富は、どちらにしても天国に持っていくことはできません。それを自分の楽しみのために使うことは、ただの浪費です。それよりも、自分が持つ富を賢く、人のために使いなさい、ということがこのたとえ話では教えられているようです。

さらに、この話では、私たちが人生で苦境に陥った時に、落ち着いてよく考え、賢く振る舞いなさい、とも教えられているように私は思います。私たちの日常にはさまざまな困難が待ち受けていて、神に祈っていれば全ては解決する、なんでもうまくいく、というわけでもないようです。困ってど

うしようもないとき、苦しい時の神頼み、で祈ることは誰しもあると思います。確かに、聖書には、求めなさい、そうすれば与えられる・・・求めるものは受け、探すものは見つけ、門を叩くものには開かれる、と書かれています。ただ、キリスト教における祈りとは、日常生活における、私たちと神様との間の対話であり、叶えて欲しい願い事がある時、自分にとって都合の良い時にだけ祈るものではないようです。困難な立場に立たされた時、神様から守り導かれていることを信じつつ、自分の頭で一生懸命考え、脱出を図る、という前向きな気概はやはり持つておくべきです。自分でできることを全てやり、その上で、結果がどうなるかは神様にお任せするのです。

私が死生学の授業で使う参考書の中に、仏教の本があります。スリランカ人のお坊さんが書かれた『自殺といじめの仏教カウンセリング』という本です。仏教は、欲望や執着のない、あるがままの状態を理想とします。たとえばさ

っきの管理人のように仕事をクビになりそうになった時、そんな時はそれを受け入れて、潔く手放す、というのが仏教そもそもの教えのようです。ただ、このお坊さんは、本の表題である、いわゆるいじめ、の問題に関してはちょっと違う答え方をしています。いじめにあって苦しんでいる人に、このお坊さんは言います、「ではどうするか」と必死で考えなさい、と。いじめのない世界は、空気のない地球のようなもので、ありえないのだそうです。どこに行ってもいじめはあるのだから、どうすればそれを生きのびられるか考え、行動しなさい、と言います。自分には生きていく権利がある、だから小さなフグのようになって生きながらえなさい、小さくて力なくても、フグがぷくっと膨れるように、ここぞという時に、周囲に主張する。ただ、感情に任せてやたらに主張するのではなく、よく考えた上で、ベストのタイミングで、最も効果の高い方法をとるのです。これは逃げるしかない、というのなら、逃げた後に

どうするか、そこまでしっかりと考え、決然と行動に移すのです。いじめ問題の最終結論は、そうやって個人個人が自己防衛のサバイバル・ゲームをすること、それしかないのだそうです。

また、このお坊さんはいじめる側の人たちについて、いじめの原動力となっているのは、自分や周囲に対する怒りだと解説します。人をいじめる人は何かに怒っているのです。怒りは他人だけでなく、自分自身も破壊する恐ろしい力です。しかし、人生は不平等で、怒りのタネはそこら中にあります。怒らない人間になるのは一人では難しい、と、このお坊さんは言います。仏さま（ブッダ）は、怒らない人間になるために、良い友達を作りなさい、仲間を作って良い影響を受けなさい、と教えているのだそうです。

私たちは、この不平等と矛盾に満ちた社会でサバイバルする能力を身につけなければなりません。社会で生き抜くことはゲームのようなものです。ただ、人を騙したり、いじめたりして生き残る

のではなく、正直であることを前提として、サバイバル・ゲームを戦うのです。勝者は、自分自身の正しい道を貫き通せた人です。信頼できる友達、仲間とお互いに守りあい、一緒に成長していく。特に、嫌な人が周囲にいる環境で、人をいじめる側に引き込まれないために、どうすればいいのか、それもまた挑戦であり、頭を使うゲームと考えれば、前向きに対処することができるのではないのでしょうか。

もちろん、最初にお話をした不正な管理人のたとえと、いじめの話はそもそもの前提が異なります。管理人は悪いことをして、自分の責任で窮地に陥ったわけですし、いじめは、何も悪いことをしていなくても、被害にあいます。

ただ、平行線をたどりながらも、今日みなさんにお話しした2つの話題には、共通点があります。それは、人生の危機に陥った時に、立ち止まって、じっくりと考えてみる、ということ。そして、生きていくのは大変だから、人に良いことをして、良い友達を作る、ということです。

では、お祈りをします。天の神様、私たちが、あなたからいただいた命を生き、ひとりひとり違う個性と能力を最大限に発揮すること、人を騙したり、悪い道に染まらずに、自分の道を正しく制覇していくこと、その努力を見守り、導いてください。

尊き御子、イエス・キリストの御名にかけて、アーメン。十

(ひおき なおこ 本学非常勤講師 2019.11.8)

Perspective

Alun Roger

【要約】英単語 “perspective” (物の見方) について、かつてのサーフィンでの実体験を通して紹介。サーフィンに誘ってくれた友人、また巨大な波を侮っていたことにより、彼は命の危機にさらされることに。その時、彼は自身の perspective の欠如に気付いた。彼は、その失敗が成長へのステップだったと振り返り、このように締めくくる、「自分自身を見比べよう、昨日の自分と。」

Today, I want to introduce the English word “perspective”, as I think it is particularly relevant to modern life and the way we see ourselves. The word “perspective” is originally from Latin and means “to look through something” or to “see clearly”. You can *have perspective*, *gain perspective*, or even *lack perspective*. If someone “has perspective” then it means that person has a reasonable and fair viewpoint on life. If they are said to “lack perspective” then often they obsess over some small, seemingly important but

ultimately inconsequential, aspect of life.

I want to illustrate this idea of “perspective” with a short story about my hobby – surfing. About 12 years ago I used to live in Chiba. Chiba is quite famous for good surfing and the waves there can get big. One day my Australian colleague called me on the phone and said “G’day mate, there is a typhoon coming so the waves are going to be great. We should go surfing”. Not wanting to seem scared I packed up my kit, jumped on the train to the east coast and stayed with my

friends overnight as the typhoon clattered around us.

The next day was clear, bright and sunny. We drove down the coast to our favorite beach. When we got to the parking area there were already a lot of surfers moving around excitedly. The waves were a perfect size. We got our wetsuits on, grabbed our surfboards and got in the ocean!

For about an hour I had a great time surfing many waves, but I was getting tired. My Australian friend, who was a much better surfer than me, looked totally fine and was catching some beautiful waves. Not wanting to be outdone by him, and not wanting to admit he was fitter or just a better surfer, I stayed in the water too. This is where I *lacked perspective*. The waves got bigger, and bigger, and bigger. Huge, heavy, angry looking, dark walls of water. I was out in the ocean in waves

that were beyond my capability. Despite my fear, I waited for one of the “smaller” giants, turned and paddled into the beach. The wave picked me up like a toy and hurled me forwards. I stood up and looked down this giant wall of water, which was now the only possible direction I could go. “This is going to be bad...” I thought. I sped off down the slab of water, racing to the bottom, so fast that I lost control and fell. I hit the water hard and bounced like a stone being skipped across a pond. Thump! I felt my ribs crack and a sharp pain in my side. Then a great froth of crumbling wave came crashing down upon my head, driving me deep under the ocean. The ocean was holding me down and twisting my body in all directions. I remember it being cold and dark, the noise of the boiling ocean was like the sound of a jet engine rushing in

my ears. The water twisting and contorting my body in all directions, so that I couldn't tell up from down, or left from right. And I was desperate to breathe, how many seconds has this been now? Six? Seven? Won't the wave release me yet? I can't breathe! I must get out! I frantically began to claw at the water around me, desperate to feel the surface and clean air. My burning lungs, starved of air began to open and I felt the seawater enter my nose and my throat, "oh, this is the end then" I thought. Just at that last moment the ocean decided to let go of me and I broke the surface, gasping and spluttering seawater from my lungs. I was alive!

So, I survived a traumatic experience, but what does this have to do with "perspective"?

I want you to think about how you measure your worth or successes in life. A great many of us tend to measure this by comparing ourselves with others. I nearly drowned because I wanted to be as good as my friend or, perhaps, I didn't want to admit he was better than me. I wanted to compare myself with him when I knew I wasn't as experienced, and the ocean is a dangerous place. So instead of thinking "Bah, Julian is staying out in the big waves, why is he better than me!?" a better (and safer!) perspective for me on that day would have been "Alun, today you have surfed the biggest waves of your life so far, that's a step forward".

In short, I want to present you with a new perspective on life: -
Compare yourself to who YOU
were YESTERDAY.

チャペル・ブックレット

宗教部では今までの「宗教講演会」のお話をブックレットにまとめています。ご希望の方は、キリスト教センターへお問い合わせください。大学ホームページからも PDF ファイルでダウンロードできます。

- No.1. 「経済の論理と人間の論理」(塩沢 美代子)
- No.2. 「心を問い続けて」(谷 昌恒)
- No.3. 「国際化時代におけるキリスト教の使命」(徐 洗善)
- No.4. 「激動化する現代史と神のみことば」(池 明観)
- No.5. 「生きることの感動」(金 纓)
- No.6. 「生きるよろこび」(村田 佳寿子)
- No.7. 「心を支えているもの」(山本 将信)
- No.8. 「主の愛この眼にありて」(武岡 洋治)
- No.9. 「日本におけるキリスト教主義大学の使命」(池 明観)
- No.10. 「いのちを支えるホスピスケア」(柏木 哲夫)
- No.11. 「天と地のひびき」(小塩 節)
- No.12. 「絵本のちから」(松居 直)
- No.13. 「ハイジ、クララは歩かなくてはいけないの？」
ーこどもの物語と聖書に見られる<しょうがい者>差別ー
(荒井 英子)
- No.14. 「お父さん、僕はなに人？ ー間(はざま)から読む聖書ー」
(金 永秀)
- No.15. 「人権・生命の尊厳 ー野宿生活者の現場からー」(松本 普)
- No.16. 「地球に、そして日本に生まれて今ここにいる」(太田 信吉)
- No.17. 「メイク・ア・ウィッシュ ～夢の応援団」(原 順子)
- No.18. 「人間関係を生きる知恵」(島 しづ子)
- No.19. 「命のことば」(水谷 誠)
- No.20. 「宗教が戦争の原因？ ー神教がアブナイ？」(桃井 和馬)
- No.21. 「福田敬太郎——神に向き合った生涯」(小野 静雄)
- No.22. 「F.C.クラインと「敬神愛人」」(黒柳 志仁)
- No.23. 「祈りつつ学び、感謝しつつ働く」
ー内村鑑三、名古屋英和学校赴任のころー(葛井 義憲)